

Oracle® Enterprise Manager

System Monitoring Plug-in インストール・ガイド for Microsoft SQL Server

リリース 8 (3.3.3.1.0)

部品番号 : B51847-01

2008 年 11 月

このドキュメントでは、まず Oracle System Monitoring Plug-in for Microsoft SQL Server の概要を説明し、次に、このプラグインでサポートされるバージョンの詳細、およびインストールの前提条件を示します。さらに、プラグインをダウンロード、インストール、検査および検証するための手順を説明します。

1 説明

System Monitoring Plug-in for Microsoft SQL Server は、Oracle Enterprise Manager Grid Control を拡張して、Microsoft SQL Server インスタンスを管理できるようにするためのプラグインです。このプラグインを Grid Control 環境にデプロイすることで、次の管理機能を使用できるようになります。

- SQL Server インスタンスの監視。
- SQL Server インスタンスの構成データの収集および構成の変更の追跡。
- 監視対象メトリックおよび構成データに設定されたしきい値に基づくアラートおよび違反の表示。
- 収集データに基づいた豊富なレポートの提供。
- ローカル・エージェントまたはリモート・エージェントによる監視のサポート。ローカル・エージェントは、SQL Server と同じホストで稼働するエージェントです。リモート・エージェントは、SQL Server が稼働するホストとは異なるホストで稼働するエージェントです。

2 サポートされるバージョン

このプラグインでは、次のバージョンの製品がサポートされます。

- Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.3 以上。
- Oracle Management Agent for Windows 10.2.0.1 以上。
- Microsoft SQL Server 2000 および Microsoft SQL Server 2005 の Standard、Enterprise および Workgroup エディション。詳細は次のとおりです。
 - Microsoft SQL Server 2000 (32-bit)
 - Microsoft SQL Server 2005 (32-bit)
 - x64 サーバーまたは Itanium ベースのサーバー上で稼働している Microsoft SQL Server 2005 (64-bit)
- Microsoft SQL Server 2005 クラスタ (アクティブ / パッシブ)。

ORACLE®

Copyright © 2008, Oracle. All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

3 前提条件

プラグインをデプロイする前に、次の前提条件を満たす必要があります。

- Microsoft SQL Server 2000、Microsoft SQL Server 2005、または Microsoft SQL Server 2005 クラスタ (アクティブ / パッシブ) をインストールします。
 - Oracle Enterprise Manager Grid Control の次のコンポーネントをインストールします。
 - Oracle Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.3 以上
 - Oracle Management Agent for Windows 10.2.0.1 以上

10.2.0.1 のエージェントの場合、Oracle Bug#5587980 に対する個別パッチを適用します。詳細は、Metalink および Oracle Bug#5587980 を参照してください。

10.2.0.2 のエージェントの場合、Oracle Bug#5587980 に対する個別パッチを適用します。詳細は、Metalink および Oracle Bug#5587980 を参照してください。

エージェントは、SQL Server 2000 または SQL Server 2005 と同じコンピュータ上にインストールする (ローカル・エージェント監視) か、SQL Server と異なるコンピュータ上にインストールする (リモート・エージェント監視) ことができます。
 - Microsoft SQL Server 2005 クラスタ (アクティブ / パッシブ) のローカル監視を行う場合、クラスタの各ノードにエージェントをインストールし、各ノードで仮想グループを順にアクティブにします (これは、グループを各クラスタ・メンバーへ移動することで行えます)。また、グループにサービスするアクティブなクラスタ・メンバー・ノードに仮想エージェント・サービスを作成またはデプロイします。

Windows HA (フェイルオーバー・クラスタ環境) での Grid Control エージェントの構成の詳細は、Oracle Metalink Note 464191.1 を参照してください。

たとえば、2 ノードのアクティブ / パッシブ・クラスタの場合、Oracle Metalink Note 464191.1 の手順の実行後、Enterprise Manager Grid Control コンソールに、3 つのエージェントがエージェント・ターゲットとして追加表示されます。2 つはクラスタ・ノードにインストールされているエージェントで、1 つは仮想エージェント・サービスです。
 - JDBC URL の一部として、IP アドレスもホスト名も使用できます。ホスト名がネットワークで一貫して解決されることを確認します。nslookup や traceroute などの標準 TCP ツールを使用してホスト名を検証できます。プラグインをデプロイする管理エージェントで次のコマンドを使用して検証します。
 - nslookup <hostname>

IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。

 - nslookup <IP>

IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。
 - (SQL Server 2000 の場合) SQL Server の Windows Management Instrumentation (WMI) プロバイダをインストールし、有効にします。SQL Server のインストール CD にある setup.exe ファイルを実行して、サポートを有効にします。詳細は、8 ページの「Windows Management Instrumentation のインストールと有効化」を参照してください。
- ```
<CD_Drive>/x86/other/wmi
```
- Windows Management Instrumentation サービスが実行中です。
  - プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定し、検証します。詳細は、3 ページの「プラグインをデプロイする管理エージェントの構成」を参照してください。

- (Microsoft Windows で稼働するエージェントの場合) ユーザーの OS 権限 (エージェントの優先資格証明で設定) が、次のいずれかのインストール・ガイドのジョブ・システムを Enterprise Manager で機能させるための資格証明の設定に関する項に記載されている要件を満たしている必要があります。
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (32-bit)』
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (64-bit) on Intel Itanium』
  - 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』
 これらのガイドは、次の場所の Oracle Database ドキュメント・ライブラリのインストール・ガイドのセクションにあります。

<http://www.oracle.com/pls/db102/homepage>

---

**注意:** ユーザーに適切な権限を割り当てないと、デプロイに失敗します。

---

- SQL Server インスタンスの TCP/IP を有効にします。詳細は、6 ページの「TCP/IP ポート情報の有効化と検索」を参照してください。
- SQL Server インスタンスで SQL 認証または混合認証を有効にします。詳細は、7 ページの「SQL 認証または混合認証の有効化」を参照してください。
- 固定サーバー・ロール sysadmin を使用して適切な DB ユーザーを作成します。

## 4 プラグインをデプロイする管理エージェントの構成

エージェントを構成するには、まず、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。また、プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定する必要があります。これを行うには、次の項の手順に従います。

### 4.1 ユーザーへの高度な権限の割当て

高度な権限を割り当てるには、次のようにします。

1. エージェントをホストするローカルの Microsoft Windows ノードで、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。そうでない場合は、追加します。
2. Windows の「ローカルセキュリティの設定」ツールを開き、エージェント・サービスを起動するユーザーに次の高度な権限を付与します。
  - オペレーティング システムの一部として機能
  - プロセスのメモリ クォータの増加
  - バッチ ジョブとしてログオン
  - プロセス レベル トークンの置き換え
3. エージェント・サービスが稼働している場合は、再起動します。

4. Grid Control でホストとエージェントに対する優先資格証明を設定します。詳細は、4 ページの「[優先資格証明の設定と検証](#)」を参照してください。
  - 優先資格証明で設定する OS ユーザーは、ローカル管理者グループに属している必要があります。
  - この OS ユーザーは、次の高度な権限を持っている必要があります。
    - オペレーティング システムの一部として機能
    - プロセスのメモリ クォータの増加
    - バッチ ジョブとしてログオン
    - プロセス レベル トークンの置き換え

## 4.2 優先資格証明の設定と検証

プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定するには、次のようにします。

1. Enterprise Manager Grid Control で、「**プリファレンス**」をクリックします。
2. 「プリファレンス」ページの左側のペインで「**優先資格証明**」をクリックします。  
「優先資格証明」ページが表示されます。
3. ホスト・ターゲット・タイプの対応するターゲット・タイプについて、「**資格証明の設定**」列からアイコンをクリックします。
4. ホスト優先資格証明ページの「ターゲットの資格証明」セクションで、プラグインをデプロイする管理エージェントが稼働しているホストのユーザー名とパスワードを指定します。
5. 資格証明の設定後、同じページで「**テスト**」をクリックします。テストが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。
6. プラグインをデプロイする管理エージェントに対して OS コマンド・ジョブを実行します。
  - Enterprise Manager Grid Control にログインします。
  - 「**ジョブ**」タブをクリックします。
  - 「ジョブ・アクティビティ」ページで「ジョブの作成」リストから「**OS コマンド**」を選択し、「**実行**」をクリックします。
  - 次のページで必要な詳細を入力し、「**発行**」をクリックしてジョブを実行します。ジョブが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。

## 5 プラグインのデプロイ

前提条件を満たしていることを確認した後、次の手順に従ってプラグインをデプロイします。

---

**注意：** Microsoft SQL Server クラスタのローカル監視を行う場合は、次のようにします。

- ローカル・エージェントを実行するクラスタの各ノードにプラグインをデプロイします。ローカル・エージェントは、クラスタの各ノードで稼働するエージェントです。仮想ホストにデプロイしないでください。
- ステップ 9、10 および 11 を繰り返します。
- 仮想エージェント・サービスの bin ディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。（この仮想エージェント・サービスのホームページで、「追加」ドロップダウン・リストにターゲット名「**Microsoft SQL Server**」がリストされていない場合は、ホームページをリフレッシュします。）

```
.%emctl reload agent
```

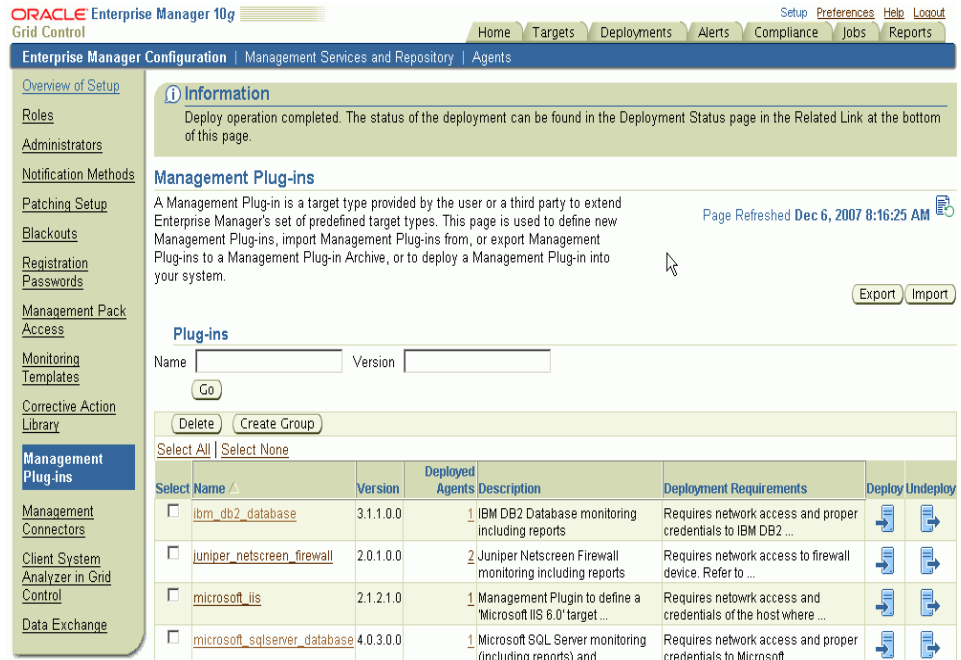
---

1. SQL Server プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。
4. 「インポート」をクリックします。
5. 「参照」をクリックしてプラグインのアーカイブを選択します。
6. 「リスト・アーカイブ」をクリックします。
7. プラグインを選択して「OK」をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明を設定したことを確認します。
9. 「管理プラグイン」ページで、SQL Server プラグインの「デプロイ」列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
10. 「エージェントの追加」をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを1つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
11. 「次へ」をクリックし、「終了」をクリックします。

優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。

エラーがなければ、次の画面が表示されます。

図 1 デプロイ成功時の画面



12. デプロイのステータスを確認するには、「関連リンク」に移動し、「デプロイ・ステータス」リンクをクリックします。

## 6 TCP/IP ポート情報の有効化と検索

次の項では、TCP/IP ポートを有効にするため、および特定の SQL サーバー・インスタンスの TCP/IP ポートを探すために必要な情報について示します。

### 6.1 TCP/IP ポートの有効化

#### SQL Server 2000 の場合

1. SQL Server Enterprise Manager の左側のパネルで SQL Server インスタンスを右クリックし、「**Properties**」を選択します。「SQL Server Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「General」タブで「**Network Configuration**」をクリックします。「SQL Server Network Utility」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「Enabled」プロトコル・リストに TCP/IP がリストされていることを確認します。

## SQL Server 2005 の場合

1. **SQL Server Configuration Manager** で、左側のパネルから「**SQL Server 2005 Network Configuration**」を選択し、SQL Server インスタンスに移動します。

右側のパネルには、指定した SQL Server のすべてのプロトコルとそのステータスが表示されます。

2. TCP/IP が有効になっていることを確認します。
3. (TCP/IP が無効の場合) 「**TCP/IP**」を右クリックして「**Properties**」を選択します。「**TCP/IP Properties**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「**Protocol**」タブで、「**enabled**」を選択して「**Apply**」をクリックします。
5. SQL Server インスタンスを再起動します。

## 6.2 TCP/IP ポートの検索

TCP/IP プロトコルを有効にした後、SQL Server を再起動して変更を適用します。サーバーの再起動後、前述の項（「**TCP/IP ポートの有効化**」）の手順に従い、TCP/IP ポート番号を特定します。

あるいは、レジストリ・エディタを使用して特定の SQL Server インスタンスの TCP/IP ポート番号を検索します。

- (デフォルト以外の SQL Server インスタンスの場合)  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥Software¥Microsoft¥Microsoft SQL Server¥  
<Instance Name>¥MSSQLServer¥SuperSocketNetLib¥Tcp
- (デフォルト SQL Server インスタンスの場合)  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥Software¥Microsoft¥MSSQL Server¥  
MSSQLServer¥SuperSocketNetLib¥Tcp

「TCP Port」にポート番号が示されます。

## 7 SQL 認証または混合認証の有効化

データベース認証に対する権限を変更して SQL 認証または混合認証を有効にします。また、ターゲットの検出とジョブの実行に使用するデータベース・ユーザーに **sysadmin** ロールを設定します。

SQL Server で、次の手順に従い、ジョブの監視および実行に使用するユーザーに対して書き込み権限を設定します。

---

---

**注意：** ユーザーがない場合は、作成します。これを行うには、タスク・バーから「スタート」に移動し、「設定」→「コントロールパネル」と選択します。コントロールパネルで「ユーザーとパスワード」をダブルクリックし、「ユーザー」タブで「追加」をクリックします。

---

---

1. コントロールパネルで「**管理ツール**」→「**コンピュータの管理**」とダブルクリックします。「コンピュータの管理」画面が表示されます。
2. 左側のパネルで「サービスとアプリケーション」に移動し、「Microsoft SQL Server」を選択して「セキュリティ」に移動します。
3. 「**セキュリティ**」をダブルクリックし、「**ログイン**」を選択します。
4. 「ログイン」を右クリックして「新規ログイン」をクリックします。「SQL Server ログインのプロパティ - 新規ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「**全般**」タブをクリックし、新規ログインの名前を指定します。「**SQL Server 認証**」を選択して、SQL 認証を使用してサーバーに接続する際に使用する一意のパスワードを指定します。

6. 「サーバー ロール」タブをクリックして「サーバー ロール」セクションで「sysadmin」が選択されていることを確認します。
7. 「データベース アクセス」タブをクリックし、「データベース ロール内の権限」セクションでどのデータベースにもロールが選択されていないことを確認します。

---

---

**関連項目：**

[http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/aa933458\(SQL.80\).aspx](http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/aa933458(SQL.80).aspx)

---

---

## 8 Windows Management Instrumentation のインストールと有効化

(SQL Server 2000 の場合) SQL Server の Windows Management Instrumentation (WMI) プロバイダをインストールして有効にします。SQL Server のインストール CD にある setup.exe ファイルを次のように実行して、サポートを有効にします。

```
<CD_Drive>/x86/other/wmi
```

## 9 権限の変更

次の場所から入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「権限の変更」での説明に従い、Windows Management Instrumentation コントロール権限、レジストリ権限および DCOM リモート・アクセス権限を変更します。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html>

## 10 監視対象インスタンスの追加

次の手順に従って、集中監視および管理対象のプラグイン・ターゲットを Grid Control に追加します。

1. プラグインをデプロイしたエージェントのホームページで、「追加」ドロップダウン・リストから「Microsoft SQL Server」ターゲット・タイプを選択し、「実行」をクリックします。Microsoft SQL Server の追加ページが表示されます。

---

---

**注意：** SQL Server クラスターのローカル監視を行う場合、エージェントのホームページは仮想エージェント・サービスのホームページです。

---

---

2. プロパティに次の情報を入力します。
  - **名前:** SqlServer2k\_Hostname など、Grid Control ターゲット全体で一意的なターゲット名。これは、Grid Control での表示名です。この名前は、Grid Control 内のすべてのユーザー・インタフェースで、この SQL Server ターゲットを表します。
  - **JDBC URL:** JDBC の URL。

例：

```
jdbc:sqlserver://<host>:<port>
```



---

---

**注意：** IP アドレス、ホスト名のいずれも指定できます。ただし、ホスト名がネットワークで一貫して解決されることを確認します。nslookup や traceroute などの標準 TCP ツールを使用してホスト名を検証できます。また、Microsoft SQL Server クラスタを監視する場合、クラスタの仮想ホストの IP アドレスまたはホスト名を指定します。

---

---

- **JDBC ドライバ:** SQL+Driver JDBC ドライバ・クラスの名前 (オプション)。

例：

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
```

- **データベース・ユーザー名:** 固定サーバー・ロール sysadmin でデータベースに対して有効なユーザー。
- **データベース・ユーザーのパスワード:** データベース・ユーザーに対応するパスワード。
- **システム・ユーザー名:** 有効なホスト・ユーザー名。リモート・エージェント監視の場合のみ必要です。詳細は、「[ターゲットを監視するためのリモート接続の構成](#)」を参照してください。
- **システム・パスワード:** ユーザー名のパスワード。リモート・エージェント監視の場合のみ必要です。
- **ロール:** (オプション)

---

---

**注意：** Oracle Management Service 10g リリース 3 (10.2.0.3) では、暗号化されたパラメータ (データベース・ユーザー名、データベース・ユーザーのパスワード、システム・ユーザー名、システム・パスワード) を再入力せずに「OK」をクリックすると、ログイン失敗を示す情報が表示される場合があります。

---

---

3. 「接続テスト」をクリックして、入力したパラメータが正しいことを確認します。
4. 接続テストが成功した場合、手順 2 の暗号化されたパラメータを再入力して、「OK」をクリックします。

図 2 Microsoft SQL Server の追加

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager 10g interface. At the top, there is a navigation bar with 'Home', 'Targets', 'Deployments', 'Alerts', 'Compliance', 'Jobs', and 'Reports'. Below this is a breadcrumb trail: 'Enterprise Manager Configuration | Management Services and Repository | Agents'. The main heading is 'Add Microsoft SQL Server'. On the right side of this heading are three buttons: 'Test Connection', 'Cancel', and 'OK'. Below the heading is a 'Properties' section. It contains a text input field for '\* Name' with the value 'microsoft\_sqlserver\_database' and a dropdown for 'Type' set to 'Microsoft SQL Server'. Below this is a table with two columns: 'Name' and 'Value'. The table contains the following rows:

| Name                                                          | Value                                        |
|---------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| JDBC URL                                                      | jdbc:sqlserver://foo.com:1433                |
| JDBC Driver                                                   | com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver |
| Database Username                                             | *****                                        |
| Password of Database User                                     | *****                                        |
| System Username (Needed when SQLServer is at remote location) |                                              |
| System Password (Needed when SQLServer is at remote location) |                                              |
| Role (Optional)                                               |                                              |

Below the table is a 'Monitoring' section. It contains a paragraph of text: 'Oracle has automatically enabled monitoring for this target's availability and performance, so no further monitoring configuration is necessary. You can edit the metric thresholds from the target's homepage.' At the bottom right of this section are three buttons: 'Test Connection', 'Cancel', and 'OK'.

**重要：** 暗号化されたパラメータを再入力しないで「OK」をクリックした場合、ログイン失敗を示すエラーが発生する場合があります。

プラグインをデプロイし、環境内で監視する1つ以上のターゲットを構成したら、次はプラグインの監視設定をカスタマイズできます。具体的には、使用する環境の特別な要件に合わせて、メトリックの収集間隔やしきい値の設定を変更できます。なお、1つ以上のメトリックについて収集を無効にした場合、それらのメトリックを使用したレポートに影響が及ぶ可能性があります。

## 11 プラグインの検査および検証

プラグインがデータの収集を開始するまで数分間待機したら、次の手順を実行して、プラグイン・ターゲットが Enterprise Manager で適切に監視されているかどうかを確認および検証します。

1. エージェントのホームページの「監視ターゲット」表で、「SQL Server」ターゲット・リンクをクリックします。

Microsoft SQL Server のホームページが表示されます。

図 3 Microsoft SQL Server のホームページ

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager 10g interface for a Microsoft SQL Server target. The top navigation bar includes 'Home', 'Targets', 'Deployments', 'Alerts', 'Compliance', 'Jobs', and 'Reports'. The main content area is titled 'Microsoft SQL Server: sql2k5\_strwa64agent' and shows a 'Status Up' indicator with a green arrow, 'Availability (%) 100 (Last 124 Hours)', and 'Host strwa64.us.oracle.com'. Below this, there are two tables for 'Alerts' and 'Host Alerts', both showing 'No Alerts found.' At the bottom, there is a 'Configuration' section with links for 'View Configuration', 'Configuration History', 'Saved Configurations', 'Compare Configuration', 'Import Configuration', and 'Compare Multiple Configurations'.

2. 「メトリック」表に、メトリック収集エラーが報告されていないことを確認します。
3. 「レポート」プロパティ・ページをクリックして、レポートが表示されていること、およびエラーが報告されていないことを確認します。
4. 「構成」セクションの「構成の表示」リンクをクリックして、構成データが表示されていることを確認します。構成データがすぐに表示されない場合は、「構成の表示」ページで「リフレッシュ」をクリックします。

## 12 プラグインのアップグレード

プラグインをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. SQL Server プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。
4. 「インポート」をクリックします。
5. 「参照」をクリックし、アップグレード用にダウンロードしたプラグインのアーカイブを選択します。
6. 「リスト・アーカイブ」をクリックします。
7. プラグインを選択して「OK」をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明が設定されていることを確認します。
9. より高いバージョンのプラグインをデプロイするエージェントに対して、Microsoft SQL Server ターゲットをブラックアウトします。必ず即時ブラックアウトを選択してください。
10. 「管理プラグイン」ページで、SQL Server プラグインの「デプロイ」列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
11. 「エージェントの追加」をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを1つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
12. 「次へ」をクリックし、「終了」をクリックします。  
優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。
13. ターゲットのブラックアウトを削除します（手順9を行った場合のみ必須）。

## 13 プラグインのアンデプロイ

プラグインをエージェントからアンデプロイするには、次の手順を実行します。

1. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
2. 「ターゲット」タブを選択して、次に「すべてのターゲット」サブタブを選択します。「すべてのターゲット」ページが表示されます。
3. Microsoft SQL Server プラグイン・ターゲットを選択して「削除」をクリックします。この手順は、特定のバージョンのプラグインのすべてのターゲットに対して実行する必要があります。
4. プラグインのデプロイ先のエージェントに優先資格証明が設定されていることを確認します。
5. 「すべてのターゲット」ページの右上隅にある「設定」リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。「管理プラグイン」ページが表示されます。
6. Microsoft SQL Server プラグインの「アンデプロイ」列のアイコンをクリックします。「管理プラグインのアンデプロイ」ページが表示されます。

7. Microsoft SQL Server プラグインに現在デプロイされているエージェントをすべて選択して「OK」をクリックします。

プラグインを Enterprise Manager から完全に削除するには、システムのすべてのエージェントからアンデプロイする必要があります。

8. 「管理プラグイン」 ページで Microsoft SQL Server プラグインを選択して、「削除」をクリックします。

## 14 接続の構成

この項では、ターゲットの監視およびジョブの実行を行うための接続の構成について詳しく説明します。

### 14.1 ターゲットを監視するためのリモート接続の構成

リモート・エージェントを使用してターゲットを監視する場合、SQL Server ターゲットが存在するすべてのシステムで、次のセキュリティ構成を行うことをお勧めします。

- WMI 名前空間セキュリティの設定 (『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「Windows Management Instrumentation 管理権限の変更」を参照)
- リモート・コンピュータからレジストリへのアクセスの制限 (『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「レジストリ権限の変更」を参照)
- ユーザーがリモートからコンピュータにアクセスできるようにするための DCOM セキュリティの設定 (『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「DCOM リモート・アクセス許可の変更」を参照)

### 14.2 ジョブを実行するための接続の構成

ローカル・エージェントまたはリモート・エージェントを使用してジョブを実行する場合、SQL Server ターゲットが存在するすべてのシステムで、次のセキュリティ構成を行うことをお勧めします。

- WMI 名前空間セキュリティの設定 (『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「Windows Management Instrumentation 管理権限の変更」を参照)
- ユーザーがリモートからコンピュータにアクセスできるようにするための DCOM セキュリティの設定 (『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「DCOM リモート・アクセス許可の変更」を参照)

構成の詳細は、次を参照してください。

- Microsoft のヘルプおよびサポートに関する Web サイト

この Web サイトにアクセスするには、次の URL に移動します。

<http://support.microsoft.com>

- 次の URL で入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』

<http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html>

- Oracle Metalink のドキュメント 367797.1

ドキュメント 367797.1 を検索するには、次のようにします。

1. 次の URL に移動します。

`http://metalink.oracle.com`

2. Oracle Metalink ページの最上部にある「Advanced」をクリックします。
3. 「Document ID」フィールドに「367797.1」と入力し、「Submit」をクリックします。

## 15 ジョブの作成および編集

ジョブを作成および編集するには、次の手順を実行します。

---

---

**注意：** 現在、ジョブはスタンドアロン SQL Server インスタンスに対してのみサポートされています。SQL Server 2005 クラスタ・インスタンスに対して発行されたジョブは失敗します。

---

---

1. Grid Control で「ジョブ」タブをクリックします。Grid Control によって「ジョブ・アクティビティ」ページが表示されます。
2. 「ジョブの作成」メニューからジョブ・タイプを選択し、「実行」をクリックします。

次のいずれかを選択できます。

- Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の起動
- Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の停止
- Microsoft SQL Server の一時停止または再開

---

---

**注意：** ジョブを編集する場合は、リストから既存のジョブを選択して「編集」をクリックします。

---

---

3. 「<Job Type> ジョブの作成」ページの「一般」タブで、ジョブの名前を指定し、個々のターゲットまたは1つの複合ターゲット（グループなど）を追加します。

---

---

**注意：** ジョブを編集する場合は、ジョブ名および選択したターゲットを変更します。

---

---

4. 「<Job Type> ジョブの作成」ページの「パラメータ」タブで、「オプション」メニューから、ジョブの開始時の動作として適切なオプションを選択します。

次のいずれかのオプションを選択できます。

**表 1 ジョブ・パラメータ・オプション**

| ジョブ・タイプ                                            | 使用可能なオプション                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Microsoft SQL Server または SQL エージェント (あるいはその両方) の起動 | <ul style="list-style-type: none"><li>■ SQL Server および SQL Server エージェント・サービスの起動<br/>(SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止している場合、あるいは SQL Server が実行中であるが SQL Server エージェントは停止している場合、このオプションを選択します。)</li><li>■ SQL Server サービスの起動<br/>(SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止していて、SQL Server のみを起動する場合は、このオプションを選択します。)</li></ul>                           |
| Microsoft SQL Server または SQL エージェント (あるいはその両方) の停止 | <ul style="list-style-type: none"><li>■ SQL Server および SQL Server エージェント・サービスの停止<br/>(SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止している場合、SQL Server が一時停止中であるが SQL Server エージェントは実行中の場合、SQL Server が実行中または一時停止中であるが SQL Server エージェントは停止されている場合は、このオプションを選択します。)</li><li>■ SQL Server エージェント・サービスの停止<br/>(実行中の SQL Server エージェントを停止する場合は、このオプションを選択します。)</li></ul> |
| Microsoft SQL Server の一時停止 または再開                   | <ul style="list-style-type: none"><li>■ SQL Server サービスの一時停止<br/>(実行中の SQL Server を一時停止する場合は、このオプションを選択します。)</li><li>■ SQL Server サービスの再開<br/>(一時停止中の SQL Server を再開する場合は、このオプションを選択します。)</li></ul>                                                                                                                                                         |

選択した内容に従って、Grid Control によって SQL Server およびエージェントのサービスが起動されます。

---

---

**注意：** ジョブを編集する場合は、そのジョブのオプションを変更します。

---

---

5. 「<Job Type> ジョブの作成」ページの「資格証明」タブで、資格証明に適切なオプションを選択します。

すでに設定されている優先資格証明を使用することも、新しい資格証明で優先資格証明を置き換えることもできます。いずれの場合も、エージェント・ホストとデータベース・ホストに対して資格証明を指定する必要があります。

優先資格証明を設定するには、Grid Control コンソールの右上隅にある「プリファレンス」をクリックします。左側の垂直ナビゲーション・バーから、「優先資格証明」をクリックします。Grid Control によって「優先資格証明」ページが表示されます。このページで、優先資格証明を設定できます。

---

---

**注意：** ジョブを編集する場合は、そのジョブの資格証明セットを変更します。

---

---

6. 「<Job Type> ジョブの作成」ページの「スケジュール」タブで、ジョブをスケジュールします。

---

---

**注意：** ジョブを編集する場合は、そのジョブに設定されているスケジュールを変更します。

---

---

7. 「<Job Type> ジョブの作成」ページの「アクセス」タブで、このジョブに対する他のユーザーのアクセス権を定義または変更します。

---

---

**注意：** 編集する場合は、そのジョブのアクセス・レベルを変更します。

---

---

8. 「発行」をクリックしてジョブを作成します。

## 16 プラグインのトラブルシューティング

プラグイン使用時に発生する可能性のある様々な問題を解決するには、次の URL で入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html>

## 17 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト

<http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

### Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。



## 18 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

### 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

[http://education.oracle.com/pls/web\\_prod-plq-dad/db\\_pages.getpage?page\\_id=3](http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3)

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in インストール・ガイド for Microsoft SQL Server, リリース 8 (3.3.3.1.0)

部品番号 : B51847-01

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in Installation Guide for Microsoft SQL Server, Release 8 (3.3.3.1.0)

原本部品番号 : E12776-01

Copyright © 2008, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987), Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する場合、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

